

---

# 私とワルツを

とーや

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

私とワルツを

### 【コード】

N9314A

### 【作者名】

とーや

### 【あらすじ】

いつもの面々で秋のキャンプに来ていた。夜風にあたろうと散歩をはじめると哀。ふと草木の間から緋色の光が見えた。哀は誘われるかのように雑林の中へと歩みをすすめる。そこには。

「なぜ生きようとするの？ 何も信じられなくせに」

そのどこまでも沈んでいく響きに愕然とした。

目の前に、私がいる。

木立と同化するように揺らめいているダークグレーの影は確かに私、シエリーだった。

「なぜ生きようとするのよ？ 何も信じられなくせに」

その影は、恐怖と混乱で怯えている私を冷ややかに見下ろして言葉を繰り返した。無機質でどこまでも冷たい囁きに心の芯が凍りついていく。

同時に、心の奥底の誰にも触れられたくない敏感な部分が悲鳴をあげはじめた。

「もう昔の私じゃない…。今は信じられる大切な人がいるもの」

私は奥底で疼いている悲鳴を覆い隠すように、半ば無意識に声を発していた。

「信じられる大切な人？ 自分の素顔は見せていないのに？」

影は皮肉めいた視線を向け薄ら笑った。緋色の瞳が妖しく光っている。

「それは信じられると思いついてただけ。悲劇のヒロインぶるのはやめてくれない、虫唾が走るから」

風が吹いた。まるで私の心のざわめきを表すかのように木々が揺れ、視界が揺れる。

「信じ込もうとしているだけ…」

「そう。結局あなたは何も信じてなんかいないのよ。人も世界も、自分すらもね」

意識が遠のいていく。

唯一、信じていることができているお姉ちゃんを失って、私は世界から色を失い絶望した。

絶望の闇の中でもがく私に手が差し伸べられた。私は戸惑いながら手を差し出した。その手はとてもあたたかく、私を闇から光に満ち溢れた世界へと引き上げてくれた。

博士。探偵団のみんな。工藤くん…。

「あなたに幸せになる資格はないのよ」

冷たい声が響き、意識が現実へ戻ってくる。

「どうして…？」

「自分の手を見てみたら？ その血塗られた両手をね」

視線を手のひらに向けると、どす黒い赤が私の両手を覆い隠していた。

「いや…！」

咄嗟に手をこすり合わせてその忌まわしいものを拭い去ろうとする。けれど、その黒赤色はこびり付いていて拭い去ることはできない。

「過去の自分は忘れて幸せに？ 笑わせないでよ。その呪縛は一生消えることはないわ」

月明かりにぼんやりと揺らめく影は、抑揚のない無機質な声で言い放つ。

「それともなに、邪魔な存在の探偵所の彼女を消して大切なものを手に入れるの？ あなた得意じゃない、毒殺とか」

探偵所の彼女…。ぼんやりと蘭さんの笑顔が浮かんでくる。まるで天使のようなあの笑顔。

なぜ急に彼女のことを？ 辻褄が合わない。そんな私の疑問を見透かすかのように悪魔の囁きが響いてきた。

「工藤新一は毛利蘭を愛している。あなたの付け入る隙は一分もないくらいにね」

「……っ」

「わかるでしょ？ 大切なものを、愛するものを手に入れるには邪



「そう。親切なのね」

「だって、私のことだもの」

「それもそうね」

諭すような穏やかな口調が妙に心地いい。

重い足を引きずるように歩き始める。心はふわふわとして軽やかなのに、それとは裏腹に身体は鉛のように重く感じられた。光の向こうには天国への階段があるのだろうか。

「そんなわけないか…」

わた菓子みたいな甘い考えに思わず自嘲した。私が天国へ行けるはずがない。待っているのは地獄の苦しみだろう。

そもそも、お姉ちゃんが殺されたときに神なんてものは存在しないと自分に言いきかせたはずなのに、天国とか地獄とか。そんなことを考えている自分が滑稽に思えた

余計なことを考えるのはよそう。行けばわかる。全てを終わらせたい。全てを消し去りたい。私の存在、全てを。

光が近づいてくる。闇に浮かぶその光はとても美しく思えた。

光は徐々に形を確かなものにし、大きさを増していく。もう少し、あと少しでたどり着ける。

はい

どこか遠いところから声が聞こえた気がした。

はいば

はいば？ はいばら？ 灰原？

ああ、私の名前じゃない。まあ、偽りの名前だけだね。もうそんなことはどうでもいいのよ。今はこの狂おしいほど魅惑的なこの光の穴に飛び込みたい、身を委ねたいの。邪魔しないで。

もう光は眼前だ。なのに身体はさらに重くなり、心の一部が締め付けられるような感覚に襲われる。

邪魔しないで……お願い。

両手を伸ばし、光に向かって最後の一步を踏み出そうとする。

灰原！

と、その声とともに、横から強い衝撃を感じて、私は倒れこんだ。

なんだろうこの感覚。温かくて力強い、なにか絶対的なものに守られているような心地よさ。たしか前にも一度……。

そう、バスジャックのとき。死へ向かおうとする私を彼が助けてくれて……。

ゆっくりと目を開けると、そこに彼がぼんやりと映った。

江戸川コナン。悪魔の薬で結ばれた秘密の共有者。

「灰原、大丈夫か？」

彼は先に立ち上がり、私に手を差し出した。

半ば無意識に、どこか虚ろに、手を伸ばし立ち上がる。ぼんやりとした視界が徐々に形を成していく。

辺りは闇に包まれていた。その闇に薄っすらと浮かぶ木立。淡い月明かりと、風による葉のざわめきで、その存在をかるうじて確認できる。

そう。今日は博士と探偵団のみんなで、秋の山へキャンプに来ていたんだ。

「もう少しで落ちるところだったんだぞ。ほんとに大丈夫か？」

彼の声に、ライトの光が指す方向に目をやると、

「……っ」

思わず絶句する。その先には何もないのだ。気を抜くと吸い込まれそうになるような断崖。巨大な闇の穴。

亡者も光の穴も、シェリーも消えていた。あの光は幻だったのか。私を恨んでいる亡者たちも、私の影、シェリーも……。

全ては幻に思えたが、ひとつだけ消えてないものがあつた。

「……邪魔しないでよ」

私はポツリとつぶやいた。

「灰原……？」

暗がりの中でも彼の困惑した表情が見て取れる。私は彼に冷たい

視線を投げかける。

「私は生きてる価値のない人間。死んだほうがいい、いいえ、死ぬべきなのよ」

ひとつだけ消えてないもの。それはタナトスだった。心の大部分を支配しているその黒い衝動は私を饒舌にさせた。

「あなただつて本当は思っているんでしょ？ おまえのせいでこんな姿になってしまった。おまえさえいなければ、おまえさえ生きていなければって」

自嘲するような笑みを浮かべ彼に問いかけた。彼はしばらく黙っていたが、

「バーロ……」

そのいつもの口癖とともに、彼は強い視線を向けてきた。強い光を帯びたそれは私の心を竦めさせた。

「死んでどうなる？ 死ねば全て解決するのか？」

「そ、それは……」

私は言葉をつまらせた。解決なんてするわけがない。死ぬことで逃げようとしているだけなのだから。

「そりゃあ、おまえの過去のことは知らないさ。おまえの苦しみを全部わかることもできない。けどさ、これだけは信じてくれよ」

彼は私を真つ直ぐに見つめて言った。

「俺がおまえを守ってやるから」

彼の発した言葉は光の槍となって私を貫いた。

「それに、この姿。今じゃけっこう気に入ってるんだぜ。最初は色々戸惑ったけどな」

彼は無邪気な子どものような仕草をして笑って見せた。

瞳が潤み、視界が揺らいだ。何でそんなに優しいの。その優しさに泣きたくなる。

「踊ろうか」

彼がつぶやくように言った。

「ほら、ちょうどそこに舞台ができてるしさ」

彼の視線を追うと、そこには円状の光が浮かび上がっていた。月明かりと木々の影が織り成す見事なまでのコラボレーションは光の演舞場というにふさわしかった。

「さあ、姫」

彼の芝居がかった声に戸惑いつつも、私の中に生まれた衝動を抑えることはできない。

彼と踊りたい。彼と繋がりたい。彼と結ばれたい。

おそろおそろ手を伸ばすと、彼は私の手を取り、光の舞台へと誘ってくれた。

舞台は光に溢れていた。ふと空を見上げると美しい光を放つ月が映った。手を伸ばせば届きそうなくらい大きく、そして美しく見える。さつきまでは闇に支配され、心もとない淡い光しか見えなかったのに。

視線を彼に移す。私は瞬間的に閃いた。

彼だ。彼が、私の靄のかかったたくすんだ灰色の世界を、光きらめく世界へと変えてくれたのだ。

見つめていると吸い込まれそうになる蒼明な瞳。優しく澄んだその瞳は、本来あるべき秋の月とよく似ていた。

優しく、眩しくて、泣きそうになる。でも、今は。  
彼に身を委ねた。

景色が巡る。世界が回る。光を巡る。

私と彼は一体になったように軽やかに、淡々とワルツを踊る。潤んだ瞳に月の光が重なり、光の粒子が生まれた。

彼の温もりに触れ、光に包まれている。私は絶対的な幸福感を感じていた。

このまま時が止まればいいのに。

「……っ」

私はとっさに動きを止めた。彼の肩越しの前方に、たった一人の観客が見えたから。

シエリー。

「とても美しくて、哀しいワルツね……」

パチパチと手を叩きシエリーは微笑を浮かべた。

月の光や周りの景色が鮮明に映ったのと同じように、シエリーの影もまた鮮明に映った。過去の私が、はっきりと。

「あなたは生きることを選ぶの？」

シエリーはどこか悲しそうな眼差しで問うてきた。

おそらく、彼にシエリーの声は聞こえてはいないだろう。彼は私の手を握ったまま支えてくれていた。彼の温もりが私に勇気を与えてくれる。

私はシエリーを真っ直ぐに見据えてコクリとうなずいた。

木々がざわめき、冷たい風が私の頬を通り過ぎた。私の昂ぶりつつある感情をなだめてくれるかのよう。

「この先、死んだほうが楽に思えるくらいの苦しみが待っているとしても？」

シエリーは目を細めさらに問う。線になった緋色の瞳が私の心を惑わそうとする。

今まで、ずっとずっと逃げてきた。苦しみからも悲しみからも、世界の全てからも。もうこれ以上、逃げたくはない。死んで償うのではなく、生きて罪を償いたい。

今のこの前向きな感情は、彼のおかげかもしれない。彼から離れてしまえば消えてしまうかもしれない。けれど、私の中に芽生えているこの光の感情を、今はっきりと実感できる。

私はシエリーに向かい、静かにうなずいた。

しばしの間があり、シエリーは小さく首を振った。

「そう……。もう何も言わないわ。ただし、覚悟しておくことね。この先の悲しい未来を……」

再び、シェリーの周りの木々がざわめき、光の粒子が辺りを彷徨う。鮮明だった影が色を失い、ノイズのようにぼやけていった。「あなたは私、私はあなた。いつもすぐそばで見ているわ、あなたの選択が正しかったのかどうかをね…」

シェリーの影と光の粒子が重なり、やがて空気と同化するように消えていった。それは、儂く散る花火のように美しく、どこか寂しげに見えた。

彼と繋がっていた手にちからが加わった。身体がこわばり無意識にちからが入っていたのだらう。

「灰原、大丈夫か？」

まるでシェリーとのやり取りが終わるのを待っていたかのようなタイミングで、彼の優しい声が響いてきた。

「ええ、大丈夫…。もう大丈夫よ」

「よかった」

全ては彼のおかげ、愛しい彼の。

いつもは隠している彼への想い、今このときだけは抑えることはできなかった。

「もう少しだけ、踊っていたい。もう少しだけ…」

「ああ」

工藤新一は毛利蘭を愛している。

幸せなときほど思い出さたくないことを思い出すもの。

彼には彼女がいる。光には光が似合う。灰色の私に入り込むことはできないのはわかっている。

それでもいい。この刹那の瞬間だけでいい、あなたを感じていた。あなたと結ばれていたい。

もう少し、あと少しだけ。

私とワルツを。

私とワルツを

(後書き)

作者より

読んでくださりありがとうございます。

名探偵コナンノベルズではじめての投稿です。CNRの時からかなりの時が経っていますが…。

久々に書いててまず思ったのが、言葉が思いつかない！

それでも、思いつかない場面を飛ばしたりして何とか書き終えることができました。

ちぐはぐなところが多々あると思いますが、その辺は流してやってください(^^)；

この話は、鬼束ちひろさんの曲、「私とワルツを」の影響を受けた作品です。

この曲が凄く好きで、聴いているときに灰原さんとシエリー、そこにコナンも絡めて話を描いてみたいなと思ったのが始まりです。

かなりとーやの気持ちを重ねて書いたので灰原さんのイメージが崩れてるかも(汗)

リハビリとして書くには難しい話でした…。

色々な本を読んで色々な話を書いて、感覚を取り戻したいです。

次は得意の光彦で(笑)

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9314a/>

---

私とワルツを

2009年6月21日22時54分発行